

# 戦間期ハワイにおける多民族性と日系人の「位置」

——先住ハワイ人との人種関係における一考察——

物部ひろみ

## はじめに

本稿は、日系アメリカ人が1910年代末から1940年代初頭までのいわゆる戦間期に先住ハワイ人に対して抱いていた認識や、イメージを考察する試みである。これまでハワイの日系史の先行研究では、日系人をめぐる「人種関係」を論じるにあたって主に白人エリートとの関係（主に白人を抑圧者ととらえる関係）に焦点が当てられてきたが、本稿では先住ハワイ人との関係に注目することにより、日系人が当時のハワイ社会の人種的ヒエラルキーのなかで自らをどのように位置づけてきたかを解明したい。まず、本稿では、「越境日本人」であったハワイ日系人が、明治日本の知識人たちが先住ハワイ人に対して抱いていた観念を共有していたことについて触れる。当時の日本の知識人は、帝国主義的な視座からハワイ人をとらえており、文化的に劣る「未開国人」で、低い勤労意欲を持つものとしたが、同様に日系人もハワイ人を日常的に「土人」と呼び、勢いを失った「滅びゆく民族」とみなした。しかしながら日本の知識人がハワイ人を軽蔑の対象であり、自らとなんら接点のない者としてとらえていたのに対し、同じハワイ社会の一員であった日系一世は、ハワイ人を日系人の下位に位置づけながらも、より近い距離に彼（女）らの存在を感じていた。そのような一世の認識は、ハワイ人と同等の地位まで日系人が「墮落する」ことへの恐怖として現れる一方で、ハワイがアメリカに併合され、ハワイ人が祖国を失ってしまったことへの同情や、白人よりも不利な立場におかれやすい非白人種であることへの共感となった。

このような日系一世のハワイ人観がもっとも顕著に現れたのが、二世に対する教育をめぐる議論であった。一世知識人は、次世代は「大和民族の世界的発展」を遂げるという使命を担っており、ハワイの日系社会の繁栄のため二世が大いに貢献することを期待していた。しかしながら、一世は、「ハワイ・ボーン」（ハワイ生まれ）の二世は、日本の青少年よりも礼儀や、勤勉さなど様々な点で劣る傾向にあると考え、二世がこれ以上「土人化」しないように親の世代は留意しなければならないと警告した。一世の教育シンポジウムでは、このテーマが繰り返し論じられ、またハワイで編纂された日本語学校の教科書には、二世への戒めとして手伝いをせずに眠ってばかりいる「怠け者のハワイ人」の子供の昔話が載せられた。

一世の教育の結果、日系二世のなかでも、「滅びゆく民族」であるハワイ人と同じ運命を歩まないために、日系人は努力するべきだという意識が生まれた。その一方で、ハワイ人を完全に他者化するのではなく、同じ社会内で共存しているという仲間意識や親近感を持ち、なかにはハワイ人の伝統的文化に敬意を表する者もいた。このようなハワイ人への連帯意識は、しばしば日系二世のリーダーにとって日系社会を守る有効な手段になることもあった。特に1930年代

以降、アメリカ本土在住者や本土からの新参者（おもに白人の軍人や、政治家、ジャーナリストなど）が、ハワイを「非白人」の跋扈する無法地帯と中傷したり、また日系二世を日本政府の傀儡と攻撃したりすると、二世のリーダーたちは、ともにハワイで生まれ育ったという「ローカル意識」を戦略的に全面に打ち出し、日系人、ハワイ人、そして白人の三者の連帯や協調を呼びかけ、外部からの圧力に抵抗した。

## 1. 先住ハワイ人と日系人を取り巻く歴史的・社会的背景

十九世紀以降、日系人とハワイ人は常に白人に次ぐ「第二の地位」を占めようとハワイ社会のなかで争ってきた。ハワイはもともと先住民の王族によって統治されていたが、1820年に東海岸からのキリスト教宣教師団が到着して以降、大きく運命を変えることになった。宣教師の末裔は、のちにビジネスに参入し、砂糖・パイナップル産業を核とする五大財閥（通称「ビッグ・ファイヴ」）を築き、ハワイを経済的に支配するのみならず、政治的、社会的にも多大な影響力を持つようになった。1893年にはハワイ王国は転覆、1894年には白人主体のハワイ共和国が建国、1898年にはアメリカに併合されたが、その推進力となったのが、「ビッグ・ファイヴ」に関わる白人エリートたちであった。先住ハワイ人は、このような過程のなかで自治権を奪われたのみならず、自民族や自文化に対する誇りも失い、また外部からもたらされた病気により、大幅に人口を減らしつつあった。一方、1885年に官約移民が開始されて以来、数万の日本人移民が砂糖耕地の労働者としてハワイに渡ってきた。やがて出稼ぎにやってきた一世がハワイに永住土着化するようになるにつれて多くの二世も誕生し、日系人は数の上ではハワイの総人口の40パーセント以上を常に占める「多数派」であった。また、戦間期に日系人は農業や、水産業などで徐々に成功を取めるようになり、経済的には、白人に及ばないものの次第にハワイ人を凌駕し始めた。しかしながら、アジア系ゆえ参政権をもたない日系一世は、準州議会に自らの声を反映させることができず、政治的には、ほぼ無力なままであった。一方、王族から政治家を輩出してきたハワイ人には、かねてから政界に太いパイプを持っており、投票登録をしている者も多く、法を制度化する術があった。それゆえ、ハワイ人の利益を守るために白人政治家と結託して日系人に不利な法案（ハワイ人のみにホームステッドの取得を限定する土地法など）も議会で通すこともできた<sup>1)</sup>。このように日系人は経済的には優位にたっていたが、アメリカ市民権を持つ二世が成人するまで政治的には不遇であった。このように日系人がハワイ社会に占める位置は必ずしも「白人の次」に固定されたものではなく、むしろ流動的なものであり、自らの利益のためにハワイ人と絶えず競争する必要があった<sup>2)</sup>。

## 2. 日本の知識人の先住ハワイ人観

さて、戦間期の日系人は、どのような先住ハワイ人観を持っていたのであろうか。「越境日本人」であったハワイ日系人は、明治日本の知識人たちの思想の影響下におり、先住ハワイ人に対する観念も継承していたと思われる。当時日本の知識人は、帝国主義的な視座から南洋の島々の人々や文化を理解したが、それと同様に、ハワイは「文明国標準」に達することのない「未開国」

であり、ハワイ人を知的にも、肉体的にも劣る「土人」だと見なした。『ヤンキー抄』(1894)のなかの一編「布哇の現勢、日本人の参政権」で、明治期の思想家、ジャーナリストの長澤別天(1868-1899)は、以下のように述べている。長澤は、スタンフォード大学に留学中の1891年「北米通信」を雑誌『重細重』に寄稿し、帰国後は「社会主義一斑」(1894)を政教社の雑誌『日本人』に発表した人物であった。彼はアメリカ本土に赴いた折、ハワイに立ち寄ったが、当時ハワイでは白人資産家が先住民の王族と対立し、アメリカの庇護のもとに白人による共和国の建国を目論んでいる最中であった。

抑カナカ(土人)は總じて蟲々たる愚民にして、國家の體面、獨立の大義と云ふが如きは何事を意味するや、解せざるなり[中略]奮發淬勵、臂を揮ふて集り来り、血をカメハメハ大王の像前に啜り、飲泣して外人の跋扈、國威の凌夷を告げ、誓ふて國家の爲めに身命を擲たんと欲する者極めて寥々にして、例のフラフラ(踏舞の名)をおどりて娛まんと欲するは皆な然り。假政府黨をして威を専にせしむ決して偶然にあらざる也。<sup>3)</sup>

ここで描きだされているハワイ人は、野蛮なダンスを踊ったり、血を偶像の前で啜ったりするなど、「文明」の外にいる典型的な未開国人の図である。実際のところハワイは明治の日本よりも大幅に西洋化が遅れていたわけではなく、鉄道も敷設され、ダウントウンには瀟洒な建物も立ち並び、人々も洋装していたが、長澤の目には入らなかったようだ<sup>4)</sup>。また当時ハワイ人は、主権を死守するために白人エリートたちに抵抗していたにもかかわらず、長澤は、ハワイ人は国家や、独立という近代の理念を理解することができず、ましてはそういった大義のために命を投げ出すことはできないと断定している。つまり彼の意識のなかで、近代化できる能力を持つ「大和民族」と文明国標準に達することの出来ない「土人」という構造があらかじめ出来上がっており、現実がどうであれ両者の差は埋められることがないのである。長澤が上記の論文とほぼ同時期に執筆した「社会主義一斑」は、社会主義を人間の平等性を実現するものとして礼賛し、日本政府から現体制を批判しているとして発禁処分をうけたほどのラディカルな内容を持っていたが、長澤はハワイ人について論じる場合、そのような平等性を当てはめることはなく、ついで彼(女)らを日本人と同格に見ることはなかった。このようなハワイ人像は、長澤の他、志賀重昂などの他の明治の知識人の著書にも垣間見ることができる。

### 3. 一世の先住ハワイ人観

それでは、ハワイ永住を決心し、現地社会の一部として生活していた一世の知識人は、どのようにハワイ人のことを認識していたのであろうか。一世も「ハワイ人」を示すのに「土人」という語を日常的に用いており、当時ハワイで出版された日本語の新聞、雑誌や、年鑑などの出版物でも、この表記はよく見られたが、それは彼(女)らが、どのようにハワイ人を見なしていたかを指し示すものである。戦間期に日本の知識人の思想の影響下にいた日系人は、彼らと似通ったハワイ人観を持ち、白人を頂点にし、その次に日系人、その下にハワイ人が位置づけられる人種的ヒエラルキーの言説を日系社会内に作り上げていった。例えば、沖縄県出身の

本派本願寺開教師の與世盛智郎（1894-1986）は、「愛する日系市民に與ふる書」という副題のついた『布哇の日本人よ』という著作を1940年に出版しているが、そのなかで日系二世を白人とハワイ人と比較しながら、結婚を介した二世の人種的「進歩」と「退化」について述べている。

経済的に政治的に恵まれず社会的地位の不利な民族にあっては男子よりも女子の方が鼻を高くする。かかる女性は自己の同種族の男性よりも高い位置にある異人種の男性に憧れ、生活様式は勿論、精神的にも身体的にも相手としたい異人種の男性の嗜好に應ずるやう努力するので、何時しか立居振舞に到るまで同種族の男性とも女性とも懸隔を生じて来るやうになる。殊にインテリ女性にあっては〔中略〕異人種の男性を相手として人種的に恵まれぬ物足りなさを満たさんとする人が多く、其の結果として布哇の東洋人には女性は次第に白人に似て行き男性は比較的土人に似ていく傾向があるやうだ。<sup>5)</sup>

太平洋戦争以前のハワイにおいて、二世は一般的に日系人同士で結婚する傾向にあったが、それでも少数は他のエスニック・グループに伴侶を求めた。二世の通婚の状況を見て、與世盛は、日系人がアングロ系白人に近付いていくのは社会的上昇で、ハワイ人に近付いていくのは社会的下降だととらえた。また、野心的なインテリ二世女性は、通婚などの手段を使って知的にも肉体的にも「白人化」し、進化を遂げていくのに比し、そのような努力をしない（もしくは術を持たない）二世男性は「土人化」し、退化していくのではないかと懸念した。このような白人（西洋人）、日本人、ハワイ人（未開国人）の人種的序列の概念は前述の長澤別天をはじめとする日本の知識人も持っていたが、ただ彼らが日本人とハワイ人の間には超えられない壁があると認識したのは異なり、與世盛のような一世は、日本人（日系人）はハワイ人に同化（退化）することは可能だと考え、それゆえ二世の行く末に対し危機感を抱いていた。

與世盛と同様の人種的序列の概念は、他の一世知識人も広く共有していた。ハワイ島のヒロ日本人教会の主席牧師の佐川寅宰は、日系二世の使命を論じる一方でハワイ人について以下のような見解を述べている。千葉県出身の佐川は、日系人の「アメリカ化」（米化）を推進していた同じ組合派の牧師奥村多喜衛に共鳴し、彼の啓発運動に協力した人物である。

二世の前途を悲観する者がある。小さい島に無制限に人口が殖えたならばどうなるであらうかと〔中略〕数は力だ〔中略〕二世は小さい島に溢れる程に殖えた方がよい〔中略〕布哇土人はアメリカインデヤンと同様に種々と政府の保護を受けてゐる。併し、彼等はアメリカインデヤンと同様の運命に陥つてゐる。競争にたへないものが滅びることは止むを得ないだらう。二世は米國市民として、他人種の市民とは違つた特殊な地位に立ち、そして米國の有用なる分子とならねばならむ。神は有用なるものに生存の権利を賦与し給ふ。大和民族の發展力は實に旺盛だ〔中略〕二世はあらゆる困難を克服して、太平洋の樂園と呼ばれてゐる布哇を来るべき太平洋時代の樂園となすことができるであらう。<sup>6)</sup>

佐川は、当時の他の一世知識人と同じく「大和民族の世界的發展」論を肯定し、日系人は「大和民族の持つ優れた属性」を武器に「海外發展」するべきだと説いた。この發展論は、日本の

民族主義的膨張論と一種ロマンチックなディアスポラの思考を混合させた移民思想であり、日系人が日本民族の一員として「海外発展」することと、ハワイ社会の構成員として現地貢献することを両立させる折衷主義的な概念であった<sup>7)</sup>。さらに牧師であった佐川は、キリスト教と社会進化論の両方から、ハワイの人種や、民族の状況を認識しようとし、「神に選ばれた」大和民族は、旺盛な生命力を授けられており、「約束の地」である楽園ハワイで成功し、繁栄する運命にあるが、一方で「劣等民族」であるハワイ人が衰退していくのは自然の摂理であり、また神の意志であるとした。そして日系人は、ハワイの人種のヒエラルキーのなかで、たとえ白人には及ばないにしてもハワイ人の上位には位置するのであるから、日系二世は現在の地位から失墜しないように不断の努力を続けるべきだと戒めた。

一方、ハワイ人を日系人の下に位置づけながらも、彼(女)らに同情的な態度を取る一世もいた。当時ハワイ最大の日本語新聞『日布時事』の社主であり、主筆であった相賀安太郎(1873-1957)は、1934年「カメハメハ祭に際して——擡頭する土人の民族意識」と題された論説のなかで以下のように述べている。

何れの社会に於いてもそうであるが、一つの低級な文明がより高度の文明によって征服された時、そこには必ず民族的、歴史的悲劇が伴ふものである。ハワイに於ても亦、過去一世紀に亘るハワイ社会の変化を土人の立場から観た時それは決して幸福な結果のみを齎したとは云へない、寧ろ此の一世紀を通じて土人の生活の底には民族の悲劇が大きな線をなして流れていることを吾人は発見せざるを得ない〔中略〕ハワイに於ける資本主義文明の移植は即ち生産手段の世界に於ける、換言すれば人間の物質生活に於ける大きな進化の過程であったと同時に、又それは布哇土人にとっては民族的滅亡、経済的隷属化、政治的隷属化、社会的悲劇への過程であった。<sup>8)</sup>

東京出身の一世の相賀は、ハワイ日系社会を代表する知識人であり、コミュニティ・リーダーであった。彼は、ハワイ人の文化をアメリカ主流文化よりも「低級」と格付けする一方で、先住民の立場からハワイ近代史を理解し、ハワイ併合をアメリカによる「征服」と考えた。彼の目線は、パターンリズム(家長的温情主義)をはらんではいないものの、ハワイ人の経験を「民族的滅亡、経済的隷属化、政治的隷属化、社会的悲劇」と述べているように、ハワイ人に対し同情的でアメリカの植民地化には批判的であった。これは前述の長澤別天によるハワイ人観と対称的な視点であり、ハワイ先住民により同等に近い立場からの共感や、憐憫が感じられる。このような視点の相違が生じたのには、ハワイに立ち寄っただけの長澤とは異なり、相賀は長年ホノルルに居住しており、ハワイ人とは毎日の生活レベルで交流があったことが大きい。また日系社会を代表する名士であった相賀が、単に労働者階級のハワイ人ではなく、上流階級や、知識人のハワイ人に知己がいたことも、ハワイ人というエスニック・グループに対し、彼が尊敬や、親愛の情を持ち得た一因であったかと推察される<sup>9)</sup>。

#### 4. 日本語学校教科書に登場するハワイ人像

前述のように、一世は二世が模範的なアメリカ市民になり、ハワイ社会全体の有用な一員となることが「大和民族の海外発展」だと考えた。一方、日系社会一般において、ハワイ生まれ・育ちの二世は、日本の青少年よりも礼儀や勤勉さなどさまざまな点で劣る傾向にあるとされ、彼（女）らを指すのに「ハワイ・ボーン」という蔑みを含んだ語が用いられた<sup>10)</sup>。一世の教育シンポジウムの座談会などでは、二世がこれ以上「土人化」しないように親の世代は留意しなければならないと論じられた。このような文脈のなかで、日本語学校の教科書で、生徒への戒めになるような例として「怠け者のハワイ人」の昔話を取り上げられたことは、必然的な結果だったと言えよう。ハワイの日本語学校では、1927年に終結したいわゆる日本語学校論争以降、日本の文部省から送られた教科書ではなく、布哇教育会が独自に編纂した教科書が全面的に用いられていた。1930年前後に出版されたと思われる『日本語讀本』巻3には、「モエモエ」という怠け者のハワイ人の子供の昔話が載せられている。「モエモエ」とはハワイ語で「寝る」という意味であり、ハワイの神話には、この名前を持つ神がしばしば登場する。

モエモエ ハ、タイソウ ナマケモノ デ、イツモ ネテ バカリ イマシタ。オカアサン ガ タロ ノ 田 デ シゴト ヲ シテ イテ モ、オ手ツダイ ヲ シマセン。オトウサン ガ、サカナツリ ニ 行ッテモ、一ショ ニ 行キマセン。<sup>11)</sup>

モエモエは、ある日母親に言いつけられて山にククイの実を拾いにいくが、ほんの数個拾っただけで、すぐに地面の上で寝てしまう。やがて時が流れて体の上に水が溜まって川となり、鼻の穴から木が生えてきて、ようやく目覚め、仕事を怠けていたことを反省するという内容である。この教科書には、朝食の準備などを進んで行く少女など親孝行な日系二世の少年少女の話が載せられているが、彼（女）らに対比する形で、モエモエは登場した<sup>12)</sup>。

しかしながら、『日本語讀本』の他の巻には、空を持ち上げて世界に光をもたらした怪力のハワイの神様や、生き別れとなった父親を探す旅に出たハワイ人の少年の物語が載せられている<sup>13)</sup>。特に後者は、父親を探すために帆を発明して遠いハワイ島にまで一人で船旅をし、最終的にはめでたく父親と再開するという話であり、読者に利口でひたむきな模範的の少年のイメージを提示している。さらに、少年の冒険を契機にハワイ人は帆を用いて太平洋を船で自在に移動できるようになったというエピソードでこの物語は閉じられており、読者にハワイ人の航海技術に敬意を払わせるような内容になっている。日本語学校の教科書には、日本人（日系人）以外の人種や民族がまるで登場しないにもかかわらず、例外的にハワイ人が主人公となった物語が、どの学年のレベルにも少なくとも一つは含まれており、そこに描かれていたハワイ人の姿は、怠惰な「おばかさん」に留まらず、心が清らかな自然の寵児であったり不思議な神通力を持っていたりしていた。いわゆる「高貴な野蛮人」(noble savage) 的な要素を持ったハワイ人であったが、日本人の少年、少女が、単に「劣等民族」として見下す相手ではなく、親しみや、好意を感じられるようなハワイ人像であった。日本語学校教員で組織された布哇教育会は、教科書を編纂する際に、生徒に郷土愛を持たせるため、日本の童話や昔話などに加え、ハワイの地方色豊かな

題材も積極的に選ぶ方針を取ったが、完成した教科書にハワイ人が数多く登場した事実を鑑みると、編纂者たちにとってハワイ人の存在は何にも増してハワイの地方性・特殊性を象徴するものだったと考えられる<sup>14)</sup>。

## 5. 日系二世の先住ハワイ人観

このような「高貴な野蛮人」的なハワイ人のイメージは、一世からの教えを通して日系二世にも受け継がれた。日系二世が、ハワイ人をどのように認識していたかを探るため、ジェームズ・タカイチ・ハマダ(1898-1962)によって書かれた *Don't Give Up the Ship: A Novel of the Hawaiian Islands* (1933) を考察してみたい。この作品は日系アメリカ作家によって英語で出版された史上初の小説だと言われており、日布時事社の英語部の主筆であり、ハワイ日系社会の若きリーダー的存在でもあった作者が、大衆小説の形を借りて社会の人々を啓蒙するための試みだったと考えられる<sup>15)</sup>。ハマダはこの小説を通して、ハワイの人種関係がいかに友好的であるかを主流社会の読者に知らしめようとした。この作品が出版される一年前にホノルルで起こったタイラ・マーシー陵辱事件(俗称アラモアナ事件)と「犯人」とされる地元の非白人の若者たちをめぐるその後の一連の裁判をきっかけにアメリカ本土の多くの白人が、ハワイは「有色人種」に支配され、白人女性の安全が脅かされる無法地帯であるような印象を持つようになってしまった。それゆえ、ハマダ自身が当時『日布時事』のインタビューで述べたように、ハワイを舞台にした白人とハワイ人の友情物語であるこの小説を出版することで、一般のアメリカ人の持つハワイのイメージを彼は回復させようとしたのであった<sup>16)</sup>。ハマダは、日系人として1922年に初めてハワイ(アメリカ)で公職に立候補したほど高い政治意識を持っており、日系社会や、ハワイ社会の福利に常に深い関心を抱いていた。

この小説のストーリーは、孤児であった「白人」青年である主人公のビル・ケイン(Bill Kane)が、ハワイ人の友人3人と力を合わせて白人有力者(アメリカ主流社会の象徴)の息子を救出するという功績を遂げることにより有力者から認められ、最終的に社会的な成功を約束されるというものである。3人のハワイ人の若者のマウイ、カウアイ、パイレーツ・キラは、物語のなかで中心となる登場人物であるが、ハマダは、彼らを一見ステレオタイプのハワイ人であるかのように描きながら、実際は正反対の性格付けを行っている。例えば、3人の若者は物語を通してピジン・イングリッシュを話しているが、結末部で実は教養のある、大変な名文家であることが明かされる。また、彼らは気ままなお調子者のように見えながらも、忠誠心や責任感が強く、自己犠牲をいとわない高潔な人間であるようにも描かれている。また、ハマダは、白人有力者が、自邸をハワイの伝統的な美術品や工芸品で飾ったり、ハワイ人の文化を最大級の賛辞でもって讃えたりするシーンをこの小説に挿入することによって、ハワイ人の伝統的文化に対する彼自身の尊敬の念を表明している。

さらにこの作品のなかでハマダは日系人の読者に向けて、日系二世が持つべき価値観、つまり模範的日系アメリカ人とはどうあるべきか、また、アメリカ社会のなかで日系二世が成功するにはいかに行動するべきかを語っている。ハマダは、主人公のビルに日系人を暗示させる様々な特徴を与えて「理想的日系二世」の役をも演じさせているが、ビルは困難な状況のなかで勤

勉さや誠実さ、そしてアメリカ国家に対する忠誠心を発揮することによって最終的にはアメリカン・ドリームを実現させる<sup>17)</sup>。また、この日系人のマスクを被ったビルと3人のハワイ人の若者との関係も、ハマダがかくあるべしと考えていた日系人とハワイ人との関係を示唆している。身寄りのないビルは、気の良いハワイ人の若者と共に労働者階級の居住区で「家族」のようにして仲良く暮らしている。しかし彼とハワイ人の青年たちのあいだには友人のようでありながらも、一種の主従関係が存在し、ビルは青年たちから「キャプテン」（隊長もしくは船長）と呼ばれている。このような彼の「理想的関係」の概念には、ハワイ人に親愛の情を抱く一方で従来通りの人種の序列も維持していた相賀など一世の認識に通じるものがあるだろう。また、3人の青年が王国の旗を掲げ、国家斉唱しながらハワイ王国を讃えるシーンと、ビルが軍艦の上に翻る星条旗に愛国心を誓うシーンが共に出て来るが、アメリカ市民として生きる日系人と、失われたハワイ王国にとらわれているハワイ人が対称的に描き出されている。さらに物語の最後には、ビルが生き残り3人が命を失ってしまうが、これは一世教育家が説いていたアメリカに根を降ろして発展する「大和民族」と王国とともに消えていく「衰退する民族」との対比とも考えられる。このようにハマダの小説には、戦間期に日系一世知識人が先住民に対して抱いていた認識、そして二世への教育に使われた神話や昔話のキャラクターと極めて近いハワイ人のイメージが出て来るが、これはハマダ自身がそのような認識をハワイ人に対して持っていたことを示唆しているのではないだろうか。

同時期の他の二世リーダーも、別な形で一世のハワイ人に対する認識を継承していた。ハワイ準州初の下院議員のタサク・オカ（1892-1936）は、1932年に「政治的に見た同胞の地位」という日本語のエッセイを執筆し、ハワイ社会で日系人を取り巻く状況を以下のように分析した。1930年にハワイで3人の二世が日系アメリカ市民として初めて公職に当選したが、オカは、その一人であった。

私は日系市民の将来縣政進出に就て憂慮し又重大な問題であると考へてゐることは、布哇土人に優秀な頭腦の持主のないと同じやうに布哇に生れた人々は自然の感化か知らぬが論理的な方面或は主義主張と云ふ觀念があまり發達しない、言葉を代へて云へば土人化しつつある傾向にあると云ふことである、之は日系市民の将来政界進出と重大微妙な關係にある問題であるから私は識者の充分の關心と對策講究を希望して止まぬのである。實に之が涵養の有無は有権者の登録問題と相待つて将来布哇に於ける日本人を永久に白人の奴隷下に置くか！否かの重大な分岐點であると信ずる。<sup>18)</sup>

二世のなかでも比較的早い時代に生まれたオカは、日本語学校の理事もしており、完全な日英両語のバイリンガルであった。彼は、対象とする聴衆によって日本語と英語を使い分けたが、用いる言語によって話す内容も変える傾向にあった。英語でハワイの人々に語りかけるとき、彼はアメリカ市民の政治家として、日系人の利益のみならず、多民族的であるハワイ社会全体の利益を考えて働きたいと述べ、彼の提出した法案は、水道管の敷設や道路の建設など、ハワイ島の住民全体の利益になるものであった<sup>19)</sup>。それゆえ、ハワイ島ヒロの彼の支持者には、日系人に加え、中国系、ハワイ系、白人も多数存在していた。しかしながら、日本語で日本人や



日系人に対して意見を表明した際は、オカもまた、前述の與世盛や佐川などの一世紀知識人の人種的序列の言説にそって、極めて民族主義的な発言をおこなった。上に挙げられた文章で示されているように、あたかも19世紀の西欧人が欧米から隔たったアフリカを「暗黒大陸」ととらえたごとく、彼も太平洋の真ん中に位置するハワイを文明から取り残された地と見なして、「布哇土人に優秀な頭脳の持主のない」と言い切り、同胞の二世の若者が野生の自然のなかで文明と知性を失い、「土人化」することを危惧した。また、オカは、日系人を「奴隷」とする圧政者だと白人を見ており、現在ハワイ日系人は、白人の下位の位置に甘んじてはいるものの、究極的には白人から独立し、社会のなかで彼(女)らと同等の立場を確立すべきだと主張している。

対照的に、オカと同年に選出された準州下院議員アンディ・ヤマシロ(1896-1960)は、先住ハワイ人に対し、協調主義的な態度を取っていた。例えば彼は1931年3月にハワイ人の伝統的文化を保護するために「布哇調査局」の設立を要請し、特別予算1,500ドルを組み込む法案を議会に提出した。この「調査局」とはハワイの史的材料の収集をおこなうことを目的とし、もともとハワイ人の議員がその設立を訴えていたものであったが、法案化したのはヤマシロが初めてであった<sup>20)</sup>。

またヤマシロは、このような協調主義を日系人、ハワイ人、ひいては地元の白人やハワイ社会全体のために戦略的に用いようとした。アメリカ本土の人々に加え、本土からハワイへの新参加者が先住ハワイ人や日系人を批判すると、共にハワイで生まれ育ったという「ローカル意識」を地元の人々の中で燃え立たせ、人種を超える連帯意識を作り上げて、協力して外部からの圧力から抵抗しようとした。特に前述の1931～1932年にかけて起こったタイラ・マーシー事件の際、容疑者とされた5人の青年たち(3人がハワイ人、1人が中国系ハワイ人、1人が日系人)が無罪判決を受けた後、ハワイ駐屯のアメリカ海軍の総指揮官であったイエーツ・スターリング提督(Admiral Yates Stirling, Jr., 1872-1948)が、多様な人種構成を持った陪審員の判断に異議を唱え、「アメリカの正義」を守るためには、ハワイの地元の人々から自治権を取り上げ、アメリカ政府から任命された政治家による委員会制政治の導入が必要だと批判した。さらにメリーランド州ボルティモア市に育ち、そこで培った人種意識をハワイ社会にも当てはめたスターリングは、ハワイを「非白人の跋扈する無法地帯」と中傷したあげく、日系二世のアメリカへの忠誠心を疑問視し、また「ハワイ諸島の奇妙な雰囲気染まりすぎている白人種」のみによってハワイは統治されるべきだと主張した。スターリングの批判に対し、ヤマシロは、ハワイのことはハワイで生まれ育った地元(ローカル)の住人が人種にかかわらず最もよく理解しているのであり、部外者から批判を受ける謂れは無いという意見を公式に表明した。そして委員会制政治の導入を否定し、地元の人々による自治権を守るべきだとする世論をハワイ社会内に形成するのに貢献した<sup>21)</sup>。

## おわりに

本稿では、戦間期にハワイ日系人が先住ハワイ人に対して、どのような概念やイメージを抱いていたかを分析した。日系一世は、日本の明治期の知識人の影響を受け、白人を頂点に日系人、ハワイ人と続く「人種的序列」の概念を持っていた。しかし、明治の知識人が、ハワイ人を「大

和民族」となれば接点を持たない「未開国人」にカテゴリー化して日本人のはるか下に等級づけたのに比し、一世は、ハワイ人の位置を日系人に近い距離に置いた。一世は、二世が「土人化」することを危惧する一方で、ともにハワイ社会の一員であるハワイ人に同情や共感を抱いた。二世は、その相反する概念を受け継ぎ、より若い同胞がハワイ人化することに警鐘を鳴らしたり、もしくはハワイ人との協調関係を促進することで、日系社会をエンパワー（強化）するための戦略としたりした。今後の研究では、日系人、ハワイ人、アングロ系白人との三者関係や、さらには、中国系、フィリピン系、そしてポルトガル系などの他民族との関係を考察することにより、戦間期の日系人が生きていた世界を様々な角度から考察してみたい。

## 注

- 1) そのような法律の一つとして1922年に施行された「ハワイ人住宅委託法」がある。詳細は、物部ひろみ「戦間期におけるハワイ日系人の帰農運動：奥村多喜衛と二世自作農」『移民研究年報』12号（2006年）：55-6頁を見よ。
- 2) ハワイ日系史の先行研究において、日系人と主流社会の白人との対立構造に焦点を置く歴史観は、これまで常に優勢であり続けてきた。特にアメリカの学界ではそのような傾向が長年顕著であったが、それはアジア系アメリカ研究が、マルクス主義に影響を受けた70年代以降のエスニック・ムーブメントの一環として生まれてきたという背景とは無縁ではないだろう。アジア系アメリカ研究者は、しばしばハワイの日系人と白人の関係を労働者と資本家、周縁派と主流派、革新派と保守派、もしくは被抑圧者と抑圧者という二項対立でとらえてきており、特に両者の「闘争の場」であった砂糖プランテーションをめぐる事例に注目した。Roland Kotani (1985), Ronald Takaki (1983), Gary Okihiro (1991), Eileen Tamura (1994) などによる代表的な先行研究を見ても明白であるように、このような歴史観は、労働や、経済、政治を論じる研究ばかりではなく、教育や、宗教を扱ったものにおいても主流であり続けてきた。対照的に日本では、同志社グループ (1991, 1997), 吉田亮 (1991, 1993, 1995, 1997, 2008), 島田法子 (1994, 2004), 物部ひろみ (2004) などが、日系人と白人の対立関係のみならず、協調関係にも光を当ててきた。しかしながら、日米両国のハワイ日系史を通じて、日系人と白人以外の人種や、民族との関係は、あまり論じられてこられず、特に「被抑圧者」とされてきた先住ハワイ人（ネイティブ・ハワイアン）の関係は充分に解明されてきたとは言いがたい。

一方、アメリカにおける先住ハワイ人研究や、ハワイのローカル文化を扱った文学研究およびカルチュラル・スタディーズでは、1990年代半ば頃からエイジアン・セトラー・コロニアリズム（アジア系入植者による植民地主義）に対する批判が生まれ、先住ハワイ人が、ハワイ社会の周縁部に追いやられるようになったのは、白人入植者だけではなく、中国系や、日系移民、そして彼（女）らの第二、三世代にも責任があると主張されるようになった。このような研究において、太平洋戦争以前から日系人は白人が作り出した社会制度のなかで利益をあげてきた成功者であり、白人と同様に抑圧者側であったとされた。日系史研究が日系人と白人の関係に終始するのは異なり、エイジアン・セトラー・コロニアリズムの研究は、日系人、白人そしてハワイ人の三者の関係に光を当てるという点においては画期的であったが、一律に白人を社会の頂点に、日系人を第二の地位に、そしてハワイ人を両者の下部に置き、人間間のダイナミクスを固定化する傾向にあった。しかしながら、現在でこそ日系人は、社会的、政治的、経済的にハワイ人を超える立場を確立しているものの、太平洋戦争後に急上昇を遂げたのであり、戦前彼（女）らが置かれた状況は、必ずしも安定したものでなかったため、これらの研究は、現在の状況から過去の事例を判断する、いわゆる「プレゼンティズム」の陥穽にはまっまっていると批判できよう。本稿では、日系史とエイジアン・セトラー・コロニアリズムの先行研究を繋ぐ立場から、日系人と先住ハワイ人との関係を考察し、日系人が戦間期ハワイ社会で占めてきた人種的な「位置」を明らかにする。

戦間期ハワイにおける多民族性と日系人の「位置」(物部)

- 3) 長澤別天「ヤンキー抄」『明治思想家集』(講談社, 1968年), 291頁。
- 4) 長澤が目にしたと思われるカメハメハ大王の像の向かい側には、デービッド・カラカウア王が建立したイオラニ宮殿がそびえている。約三年の年月をかけて1882年に完成したイオラニ宮殿は、贅をつくした造りになっており、ガス式のシャンデリア(五年後には電気式に変えられる)、電話などの当時最新の設備を備えられていたが、そこにはハワイが文明化された一等国であることを世界に対して証明する意図もあったと言われる。
- 5) 與世盛智郎『布哇の日本人よ』(本願寺派慈光園, 1940年), 35頁。
- 6) 奥村多喜衛著編『楽園叢誌』(内外出版, 1940年), 22-23頁。
- 7) このような膨張主義的な観念は当時の日本の知識人の間にも浸透していた。小熊英二『単一民族神話の起源:<日本人>の自画像の系譜』(新曜社, 1995年)参照。また、アメリカ本土の日系一世の知識人も類似した観念を持っていた。Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race History, and Transnationalism in Japanese America* (New York: Oxford University Press, 2005), 91-97を見よ。
- 8) 『日布時事』1934年6月11日。
- 9) アメリカ併合後も、ハワイ人は、もと王族関係者の上流階級(多くの財産を持つ)と、もと庶民によって構成される労働者階級に分かれていた。
- 10) 1920~1930年代の日本や日系社会には、ハワイ育ちの二世を表す「ハワイ・ボーン」という概念が存在したが、その詳細については物部ひろみ「戦間期ハワイにおける日系二世女子教育:日本語学校から料理講習会まで」『立命館言語文化研究』20巻1号(2008年9月):192頁を見よ。
- 11) 『日本語讀本』巻3(布哇教育会, 1930), 70-71頁。
- 12) 『日本語讀本』巻3(布哇教育会, 1930), 70-75頁。
- 13) 「空をおし上げたマウイ」『日本語讀本』巻5(布哇教育会, 1930), 45-50頁;「カワイ島のパーカー」『日本語讀本』巻4(布哇教育会, 1930), 23-31頁。
- 14) 1929年に布哇教育会によって決定された日本語讀本編纂趣意書によると「日本語讀本の主眼とする処はハワイにおける児童に普通の日本語を授け併せて米國思想に則り日系市民としての完全なる人格養成に資するにある」とされ、修身教材については「郷土的教材教課を加う」こと、「童話、伝説、寓話、俚諺等は適宜之を採る」ことが記されている。日本語学校教科書に多くのハワイ人が登場したのには、このような背景があった。小沢義浄『ハワイ日本語学校教育史』(ハワイ教育会, 1972年), 149頁。
- 15) James Takaichi Hamada, *Don't Give Up the Ship: A Novel of the Hawaiian Islands* (Boston: Meador Publishing Co., 1933).
- 16) 『日布時事』1933年6月4日。
- 17) Hiromi Monobe, "The Embedded Messages in James T. Hamada's *Don't Give Up the Ship*, the First Japanese American Novel in English," *Asian American Literature Association Journal*, 6 (2000): 96-97.
- 18) 岡多作「政治的に見た同胞の地位」, 大冨味朝徳『最近の布哇事情』(海外研究所, 1932年), 93-94頁。
- 19) 『日布時事』1931年3月6日。
- 20) 『日布時事』1931年3月18日。
- 21) 『米国内政関係雑纂』(1932年)外交文書, 外交史料館所蔵。